

## 2 大江玄仙の栗崎流金瘡外科免許状について

川 寫 真人・カトリーナ シバタ

医療法人玄真堂川寫整形外科病院

平成十六年(二〇〇四)七月二十一日、中津市鷹匠町に開館した中津市歴史民俗資料館分館大江医家史料館は同市内の村上医家史料館に次ぐ二番目の医家史料館で、中津藩藩医を代々務めた大江家の史料を中心に幕末の種痘から田原淳に至る明治前後の医学史料が展示されている。中でも初代大江玄仙の栗崎流金瘡外科免許状は市内でも大江家のみにはほ無傷の状態で保存されていたものである。

大江家は中津市内の蛸瀬町(当時は大江村)に居住していた大江五郎衛門(範行)(一六八五～一七三二)をもって家祖としている。五郎衛門の祖先は、延元四年(一三四三)頃中津に土着し、丸山城を有していた

大江備中守孝範といわれている。天正一五年(一五八七)黒田孝隆如水は豊前六郡(京都、築城、仲津、上毛、下毛、宇佐)を秀吉より与えられた。孝隆は始め、京都郡馬ヶ岳城、次いで宇佐郡時枝城に移り、次いで現在の中津城になっている大江氏の丸山城を攻めた。攻められた大江一族は蛸瀬川一帯に移り住み、代々医師をなすものが多く出た。付近一帯は大江村と呼ばれ、一八二二年藩主奥平昌高の命により「中津バスタード辞書」を編纂した大江春塘も京町の大江家として代々医家をなしてきた。

大江五郎衛門の子、玄仙(一七一〇～一七九二)は範満、寿漢翁とも称され、宝暦四年(一七五四)長崎に赴き、島田道碩の下で栗崎流の金瘡外科を学び、「金瘡外科一流之事」と記載された免許状を授与された。

栗崎道喜(一五八二～一六六五)は天正一〇年(一五八二)肥後国宇土郡栗崎村で生まれ、幼時に長崎に移り、その後ルソンに渡ったと伝えられる。医学を志し、特に外科を専門に修めた。帰国後は長崎万屋町において開業、特に金瘡外科を得意とし、南蛮流栗崎流

の創始者とされる。

栗崎道喜の子栗崎正羽（一六六〇～一七二六）は道仙、道有と号し、父より栗崎流の外科学の手ほどきを受け、元禄四年（一六九二）江戸に出て、幕府医官に挙げられ、元禄一四年（一七〇二）江戸城において負傷した吉良上野介の治療に当たったこと有名である。

大江玄仙の免許状には島田道碩のみならず栗崎道喜の名前が記載されており、時代的には整合性が無いため、単なる名前として入れたのか、栗崎家が代々栗崎道喜と名乗らせていたのか不明である。また大江玄仙に道仙という名前を与えているのは正羽の号道仙を与えたものであろう。

筆者の祖先の墓に川島道庵の墓があり、栗崎流右傳流を学び、宝暦一一年六月二日逝去とされていることからすると同時代に中津藩から複数の医師が栗崎流を学んでいたことが考えられる。

医家として二代目の大江文明（一七五七～一八二二）は範茂、雲澤と号し、安永九年（一七八〇）奥平昌鹿より九人扶持を授与された。三代大江元泉（一七六八

～一八二五）は範古、一伯、定武とも名乗り、天明七年（一七八七）長崎の吉原元棟より「杏蔭齋正骨術名之目」の整骨免許を授与された。寛政八年（一七九六）奥平昌高より十人扶持を授与された。

四代大江玄明（一七九九～一八七七）は範吉、面山とも名乗り天保七年（一八三六）参勤交代で江戸参府に随行し、記録を残した。昌暢、昌猷、昌服と三代にわたって藩主に仕え、一〇〇石を授与された。五代大江雲澤（範治、達義、清）（一八二二～一八九九）は天保十二年（一八四二）華岡医塾大坂分塾合水堂に入門、青洲の弟華岡準平に医学を学んだ。明治四年、中津医学校校長として学校を経営した。「医は不仁の術、務めて仁をなさんと欲す」という医訓が残っている。六代大江億司（範敏）（一八六四～一九一九）は明治十九年大分医学校を卒業し、明治二十九年大分医学校院長取立方を務めた。七代大江忠綱（一九一〇～二〇〇二）は東京慈恵医大を卒業、鷹匠町にて医業を営んだ。大江家には解体新書など多くの医学史料が残っている。